

郷土の芸術と記憶の継承

渡邊 太 (Futoshi WATANABE)

【目 的】

本研究では、鳥取県中部を中心に郷土の芸術をめぐる記憶の継承について考察する。

日本の近代化の歴史において日本海側は「裏日本」と貶められ、停滞と後進の烙印を押されてきた。阿部恒久、古厩忠夫らの歴史研究は、「表日本」に対する「裏日本」の後進性・停滞性が、急速な近代化を実現するために太平洋側に資源を重点的に配分した明治政府による地理的不均等政策に由来することを明らかにした。「裏日本」とは、いわば近代化に伴う「伝統の発明」だったのである。

社会経済的には中央政府から後進性を強いられたものの、近代化の過程で日本海側にも豊かな芸術・文化の営みが育まれてきた。鳥取県中部では、戦前、東京美術学校で黒田清輝から西洋画を学んだ中井金三が帰郷して倉吉中学に勤め、前田寛治、前田利三、河本緑石らと「砂丘社」を結成し、郷土の芸術文化に大きな影響を残した。また、柳宗悦の盟友である鳥取の医師・吉田璋也を通じて民藝運動も盛んに展開した。これら豊かな芸術・文化の伝統は、「裏日本」として貶められ中央から押しつけられた否定的な自画像に代わって、改めて獲得すべき肯定的なアイデンティティである。

倉吉で長年、小学校教員として勤務する傍ら民藝運動に参加し、数多くの作品を残した板画家・長谷川富三郎は、現在よく知られているし、その作品も市内各所で目にすることができる。全国的な知名度は限られているものの、作品は地域社会で親しまれている。他にも、民藝運動周辺に限っても、倉吉では高木啓太郎、徳吉英雄、吉田たすく等、郷土作家たちの多彩な活動が見られた。だが、作家たちと親交のあった世代が徐々に鬼籍に入られるにつれ、記憶の継承という課題に直面しつつある。

優れた郷土の芸術は、地域への愛着とアイデンティティを育成する。次世代に伝える努力を怠れば、十数年も経てば忘却の淵に沈みかねない。郷土に優れた芸術があったことを知ることは、地域への誇りを育む。記憶の継承の危機は、地域アイデンティティの危機とも言える。本研究では、20 世紀に活躍した郷土の作家と親交のあった世代を対象とした聞き取り調査を実施し、次世代への伝承の方法を探りたい。また、本研究自体も郷土の芸術についての記憶の継承の一助となることを目指している。

○共同研究者・協力者 岡田 有美子（明治大学 大学院理工学研究科 博士後期課程）

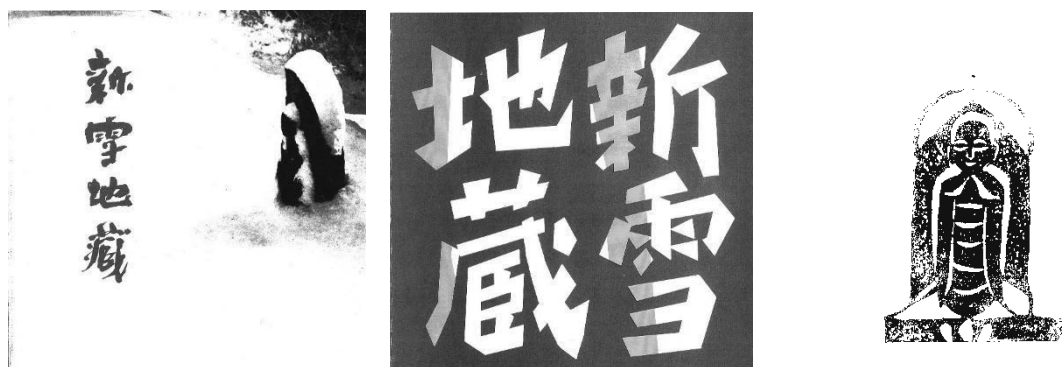
【研究の概要】

本研究では、平成 30 年度「鳥取看護大学・鳥取短期大学 地域研究・活動推進事業助成金」による共同研究「地域アートプロジェクトの深層効果」に引き続き、倉吉市明倫地区のアーティスト・イン・レジデンス事業「明倫 AIR」と連携し、共同研究に取り組んだ。今年度の調査では、互いに交流の深かった長谷川富三郎と高木啓太郎を中心に扱った。

長谷川富三郎は、1910 年（明治 43 年）、姫路に生まれ、15 歳で米子中学に転校。鳥取師範学校を卒業し、倉吉市の明倫小学校に勤務する傍ら、吉田璋也を通じて柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司ら民藝運動の創始者と出会い、戦後は棟方志功に師事して板画を始め、旺盛に作品制作に励んだ。民藝運動のなかで長谷川の特色は、民藝を教育に活用することを試みた点である。民藝を通じて

郷土の理解を深める長谷川の民藝教育は、倉吉における芸術文化の継承に大きく寄与した。

高木啓太郎は、1916 年（大正 5 年）倉吉で生まれ、戦前に満州へ渡り敗戦後はシベリア抑留を経験する。戦後、サンカメラを経営する傍ら、画廊、喫茶、蕎麦屋など開き、そこが芸術家の集うサロンの交流の場となる。大山参道の地蔵を撮影した『新雪地蔵』、長谷寺参道の地蔵を撮影した『長谷坂三千遍』『長谷坂五千遍』、シベリア抑留経験を描いた『お陽さんぽつんと赤かった』、民俗行事・民俗の風景を撮影した『鳥取の年中行事』『因伯写真往来』など、著作も多数出版している。高木の表現活動は、写真、泥仏、書、墨絵など多岐に渡り、総合芸術家の様相を呈している。



写真：高木啓太郎 装幀・板画：長谷川富三郎（出典：高木啓太郎『新雪地蔵』民芸、1969 年）

高木啓太郎が 1969 年に出版した写真集『新雪地蔵』は、長谷川富三郎が装幀とカット板画を担当し、いわば両者のコラボレーション作品となっている。伯耆大山参道のお地藏様を撮影した写真集の出版を高木に勧めたのは、長谷川だった。

「明倫 AIR 2019」招聘アーティストの久保田沙耶は、2017 年から長谷川富三郎をはじめとして山陰の作家たちのリサーチを重ねてきた。砂丘社や民藝運動など、地域の芸術史を辿るなかで、久保田はジャンルを超えた芸術家たちの交流に注目している。喫茶「久良」や「土蔵そば」は芸術家の集うサロンの場であった。最新の技法を実験し、批評を通じて高めあい、相互の活動を刺激した。今回実施した聞き取り調査では、写真家・植田正治との交流の様子も窺えた。

倉吉博物館で開催した「物と祈り」展では、リサーチの成果を活用して、郷土の作家たちの交流を伝える展示を試みた。戦時下、物不足のなか苦心しながら創作に励んだ作家たちの活動は、戦後つぎつぎと開花し、ジャンルを超えた交流によって地域の芸術と文化を豊かに育んだ。「物と祈り」展で発表された久保田沙耶の新作は、山陰の芸術交流史を踏まえたものである。

地域の文脈を発掘するリサーチを基盤とするアートプロジェクトでは、作家が地域に根ざした文化的伝統を現代の視点から解釈し、新たな価値を付与する。かかるアートプロジェクトには、郷土の芸術と文化にまつわる記憶を継承する有効な手段としての活用が期待できる。

【成果】

- (1) 「物と祈り ～明倫 AIR 成果発表 倉吉の作家を辿る～」倉吉博物館第 3 展示室、2020 年 2 月 15 日～2 月 27 日。
- (2) 久保田沙耶×岡田有美子×渡邊太「物と祈り」トークイベント、倉吉博物館第 3 展示室、2020 年 2 月 24 日。
- (3) 渡邊太「文化・芸能の継承について」湯梨浜町文化団体協議会研修会、湯梨浜町中央公民館、2020 年 1 月 27 日。